

「-196°C 後編」

—二稿—

2025/10/06

さいの

〈人物表〉

長富 慶三 ながとみ けいぞう
(48)

丸バツ署・刑事課の警部補

小西 純也 こにし じゅんや
(39)

長富の部下・巡査

原中 進 はらなか すずむ
(58)

丸バツ大学の物理学教授

山根 海舟 やまね かいしゅう
(44)

原中研究室の准教授

壁に並べられたデュワー瓶、四、五本。

山根、その一つの側面を注意深く見ていて、

長富 「ご熱心ですね」

山根がハッと振り返ると、長富と、クーラーボックスを携えた小西。

山根、驚きを取り繕って、デュワー瓶を置き、

山根 「……研究を引き継がなければいけませんから」

長富 「素晴らしいです。あ、すいませんこれお返しします」

と、タイマーを渡そうとするが、その手を戻して、

長富 「あ、山根さん。ちょっと確認したいんですが」

と、山根と目を合わせる。

山根 「……ええ。なんですか？」

長富 「あなた先生がタイマーを押し忘れたから、瓶から液体窒素が溢れてしまったと言いましたよね」

山根 「ええ、それが何か？」

長富、タイマーを掲げて、

長富 「先生はね、タイマーを押してたと思うんですよ」

山根 「は？」

長富 「現場検証の時、ここに掛かっていたタイマーは」

長富のタイマー、00:00の表示。

長富 「ゼロになってたんです」

山根 「（本当に分かっておらず）それが何か？」

長富 「このタイマーはいつも15分にセットしてあると言いましたね。もし押し忘れていたら、こうなってませんか？」

長富、タイマーを操作してから、再び掲げる。

15:00の表示。

長富 「どういうことか、分かりますか？」

山根 「（考えるが）……いえ」

長富、タイマーを操作してから、再び掲げる。

00:03にセットされたタイマー、すぐにアラーム音。

小西、耳を塞ぐ。

山根、長富の意図が分からず、困惑して、

山根 「あの？」

長富 「ちょっと待ってください」

しばらく鳴り続けた後、一人でに鳴り止む。

長富のタイマー、00:00 の表示。

山根、ハツとする。

長富 「このタイマー。ストップを押さないままだと、ゼロに戻るんです」

山根、目を逸らす。

長富 「こう考えました。先生はタイマーを押して15分後にここに戻ってきた。その時、すでに致死量の窒素がここに充滿していて、ストップを押せなかったんです」

山根 「ですから15分では瓶から窒素は溢れません」

と、毅然とした態度。

長富 「……そうなんです」

山根 「何かの拍子に先生がゼロに戻してしまったんでしょう。研究室でカップ麺を食べる時にも使ってましたし」

長富 「そうですか。カップ麺でしたか」

山根 「ええ」

長富 「あと、もう一つ引っかけてるんです」

山根 「……どうぞ」

長富 「仮にタイマーを掛け忘れたとして、窒素が溢れている可能性があるので、専門家の先生が易々と入るでしょうか」

山根 「咄嗟のことで焦ったんでしょう」

長富 「そうですか？ やっぱ15分で瓶から窒素が漏れてたんじゃないませんか？ もう一度試させてください」

と、先ほどまで山根が触っていたデュワー瓶を持ち上げて、液体窒素供給装置にセットする。

山根 「ちょっと、やめてください」

と、焦って長富を止めようとするが小西、制する。

長富 「なんでですか。さっきは良いって言ったじゃないですか」

長富、操作盤のボタンに手を伸ばす。

山根、必死に小西を振り払い長富の腕をグッと掴む。

山根 「（大声で）やめろ」

長富、焦った山根を見てニヤリと止まり、手を戻す。
山根、我に帰って、

山根 「……さっき大学から、設備点検まで利用禁止と言われて」
長富 「そうでしたか。そうとは知らず、すみません」

山根 「（取り繕って）そろそろお引き取りを」

長富 「最後です。こちらを調べても？」

と、壁に並べられたデュワー瓶を指して、

長富 「素人考えで恐縮ですが、もしかしたら、瓶に穴が空いて
たんじやないかなと思って。それだけ調べたら帰ります」

山根 「……どうぞ」

長富 「ありがとうございます」

小西、クーラーボックスを開ける。

中にはペットボトルの水が何本も。

小西、一本取り出して長富に渡す。

長富、蓋を開けて、ゴクッと飲んで、

長富 「今年の夏は暑いですね。ここなんてクーラーすらない。
一本どうですか。冷えてますよ」

山根 「結構です」

長富 「そうですか」

と、ペットボトルの水を壁に並べられたデュワー瓶
に注ぎはじめる。

山根、驚いて、

山根 「何してるんですか」

長富 「穴が空いてるか、すぐ分かると思って」

山根 「……早くしてください」

長富と小西、壁に並べられたデュワー瓶に次々と水
を注いでいく。

小西、供給装置に繋がれていたデュワー瓶も横に並
べて、水を注いでいく。

山根、その様子を見ている。

× × ×

空になった大量のペットボトル。

山根 「気が済みましたか？」

デュワー瓶はどれも水が漏れている様子はない。

長富 「……いいえ、これからです」

山根 「？」

長富 「小西くん」

小西、クーラーボックスからロックアイスを取り出して、いくつか長富に渡す。

長富と小西、デューワー瓶にポチャンとロックアイスを落としていきながら、

長富 「この金属の瓶、魔法瓶と同じ仕組みらしいですね」

山根、右端に置かれた瓶を見ていて、

山根 「……ええ」

長富、ペットボトルの水を一口飲む。

ボトルの周りは結露で水滴がびっしょり。

長富 「これがもし、二層になっていないただの瓶だったら大変です。外の熱が伝わって、マイナス19.6度以上の高温になった窒素はたちまち気化してしまう。きっと、15分もあれば大惨事です」

長富、並べられたデューワー瓶を見る。

長富 「そうやって」

右端に置かれた瓶だけ、結露で水滴がびっしょり。

長富 「原中先生を事故に見せかけて殺したんですよね」

山根 「……」

長富、右端の瓶をくまなく見て、

長富 「きっと、この瓶の外側にだけ、穴が空いている。それも瓶がすり替えられていることに先生が気づかなかったほどの小さな穴です」

と、瓶の側面をじっと見る。

長富 「本当に分かりませんね。けれどそれで十分です。魔法瓶の真空の層がなくなってしまうば、このペットボトルと同じ、ただの瓶ですから」

と、ペットボトルを掲げ、山根をじっと見る。

山根 「……」

山根、開き直って、

山根 「刑事さん、一つ間違えてます。私は先生の使う瓶だけすり替えたんじゃないません」

長富 「？」

山根 「ロシアンルーレットですよ」

長富、目を見開く。

山根、壁に並んだ瓶を一つずつ触っていき、
「実験に使う液体窒素を瓶に入れるのは私と先生が一日おきに交代でやる当番です。穴を開けた瓶は、自分でも分らないようにシャッフルしました」

と、右端の瓶を手取る。

長富 「どうしてそんなことを？」

山根 「先生が死んだら研究は私の手柄、私が死んだら先生の手柄ということですよ」

長富 「……」

山根 「……あんな人でも、先生を殺す勇気が私には無かった」
静かに、遠くからサイレンの音が聞こえる。

小西、長富に目配せ。

長富 「……署で続きを聞かせていただいても？」

山根、黙って頷く。

(おわり)